



巨大な移民村の出現

児玉 香菜子

(こだま かなこ)

本館外来研究員

九年後の変貌

北京から北西へおよそ一〇〇〇キロメートルの地点で、チベット高原から北上してきた黄河は陰山山脈にぶつかって大きく南へ湾曲する。この山脈の北側はウラト(烏拉特)とよばれ、年平均降雨量が二五〇ミリメートル以下の乾燥地域である。この乾燥地域に暮らす人びとは牧畜を業とし、おもな家畜はヤギ、ヒツジとラクダである。すでに、多くの牧畜民が定着化し、日干しレンガの固定家屋に暮らしている。おもな交通手段はバイクと四輪駆動車で、ウマはほとんど見られない。

この山脈の北麓に小さな町がある。わたしが一九九七年にここを訪れたとき、行政機関、テレビ局、映画館、デパートまでひと通り揃っていて、いわばウラトの行政、経済、文化の中心であった。映画館前の広場には露天のピリヤード台が立ち並び、田舎からやって来た牧畜民の若者たちでぎわっていた。

それから九年。再びこの町を訪れる機会をえたわたしは、この草原のなかの町がまったく変わっていないこと、むしろ人影もまばらで閑散としているのに大変驚いた。経済発展が著しい中国。なかでも内モンゴル自治区は首府フホト市の地価がわずか一年で三倍になるなど、中国のなかでもっとも経済発展がめざましい地域である。大都市から小都市まで、高層ビルが建ち並ぶなかで、ここはむしろさびれた感じさえする。古びた映画館がいまだにこの街のいちばん大きい建物だった。聞けば、この地域は、土地荒廃が著しく、生態環境の回復

移住を拒否していたラクダ牧畜民

さびれた映画館。いまだにこの町でいちばん大きい建物であった



巨大な移民村。真新しいマンション群が建ち並んでいる



をはかるため、住むことをあきらめざるをえないような状況にあるという。そのため、二年前の二〇〇四年に、行政の中心が五〇キロメートル離れた山脈の南側に移されたのだ。山脈の南側は黄河によって水資源が豊富で、なおかつ今後、旱幹産業として発展させたい鉱山業に有利であるという。

生態環境への影響

山脈を越えて、新しい町にはいると、突如整然と並んだ真新しいマンション群が目に見え込んでくる。そこは巨大な移民村であった。移民村とは、生態環境の悪化を理由に締めだされた人びとが暮らすために建設された居住地である。わたしはこれまでいろいろな地域の移民村を訪れているが、町ごと移転させてこれほど大規模に建設された移民村をはじめて見た。規模こそ異なるけれども、共通している点がある。それは、どこも人影さびしく、閑散としていることである。現在二万人が暮らすというこの新しい町もいまだ閑散としている。ウラト地域から移住してきた牧畜民はわずか一〇〇〇人にすぎないという。

すでにこの巨大な移民村の建設に約五二億八〇〇〇万円が投資されたそうだが、今後、この新しい町に誰が住むのであろうか。誰のための町作りなのだろうか。

新しい都市建設にもたうとう水消費量の増加や鉱山開発による汚染の増加が懸念される。環境保全と経済発展を両立させるためのこの移住政策は、生態環境への負荷を北から南へ移転させただけ、いなくむしろ、増加させているといえよう。